

# 立教大学史学会小史

立教大学史学会

## Ⅲ よみがえる立教史学／終戦直後より現在まで

### 1 混乱の中に道を求めて

#### 終戦直後の史学界

井上幸治

いまから思うと、終戦直後の混乱を体験したことは、幸いだったのかもしれない。そこにおいて、歴史の存在そのものが問われる契機があり、われわれの歴史観というものが、ある时期的危機意識にたえず直面していかねば、とぎすまされていまいと、歴史家はだれでも感じなければならなかった。

終戦直後の史学界というと、わたくしはいつでも、歴史は現在の衝動によって書きかえられなければならないというような意味のランケの日記のことを思い出す。戦時中、ランケならよいだろうと、林健太郎君が選集を企画し、わたくしは書簡と日記を担当し、上のことばに日記のなかで行きあたった。歴史は書きかえられるということは、ランケでなくても言っているが、ことさらランケである点に多少の意味がある。一九世紀中期以後、プロイセンの政治的精神状況のなかで、現在のレジームに肯定的に、なんらの不安も焦燥も感じないで、研究生活を送ったかれにして、歴史は現在の衝動におうじて書きかえられなければならないといったところに、歴史のひとつの宿命を感じた。歴史は歴史であって、いつでも歴史は変らないと言ったとしたら、それは単純に基礎的

ではあるが、分散的な事実についての歴史知識が、それをひきだす技術をいっているのにすぎなかった。われわれが自覚しようと、自覚しようと、歴史の意味は大きく変わっていた。

終戦直後の精神的混乱は、価値の転換をもたらしたものであった。だれでも、とうぜん歴史家も、なんらかの意味でこれを主体的に受けとめ、自分の道をみいだして行ったが、巨視的にみると歴史は新しい方向をまさぐる手がかりのように考えられる一方、民族の過去をまさぐる一種の社会病理学のようなものとなり、終戦直後の一時期、歴史学はあらゆる社会科学のなかで、指導的地位を失ふという状況になった。当時の史学界を回顧するとして、二、三の点をあげることができる。

まず第一に、民主主義という最高政治形態を確立するために、歴史家の社会的責任がなんらかの方向で自覚された。そのとき日本史研究者は日本社会の構造分析を推しすすめる、病理学的な方向をつよめたが、一方、西洋史研究者は西欧近代社会の発展のパターンはこうである、東欧も日本も特殊な、これとちがう後進型のパターンにぞくする点を強調し、日本史と西洋史が共通の問題意識をもったことは、歴史研究の上に大きな発展であり、近代社会成立、絶対主義、市民革命論が当時のテー

マであった。これらの研究方法において戦前の講義版、ある程度その延長線上にあった大塚史学が支配的地位を占めたことは、あらためて指摘するまでもなく、今から思うと概念的理解にとどまる歴史的思考の怠惰、教条主義におおいていたことを反省しなければならぬ。日本の社会科学的方法的特質として、それは社会的歴史の現実の置れていることであるが、危機意識の過剰は、いつも理論構成にかりたて、歴史研究のばあいは事実的認識の過程を省略させるのがならわしである。

歴史というものはその結構的に通行しない。これらの方法論のなかで、正しく受けつぐべきもの、批判すべきものを、きびしくわけて考えなければならぬ。たとえば近代社会成立過程において、単一の封建的土地所有を概念的にとらえたために、古典荘園の時期の諸特質は、市民革命までそのままの概念内容で考えられ、そこに近代発展の余地をみとめなかった結果は、ライシャワーや桑原武夫などの無概念的「近代化論」によって盲点をつかれる結果になった。

終戦直後の史学界の第二の特徴としてあげられるのは世界的視野の確立ということであろう。

いわゆる皇國史観が直接批判にさらされたのは、民族の優劣性と国家の特殊性だけを論じて、民族と国家その

ものが世界内存在、つまり世界史的存在であることを無視した点にある。べつに高等学校の教科に世界史が置かれたからではなく、欧戦という世界体験そのものが歴史観の閉鎖性をうちやぶったことによって、新しい問題として、世界史が日程にのぼって来たということである。

しかし、今から反省される点は、やはり世界史の可能性とかその理論的構造、具体像とかについて、なんら根本的な討議をへなかつたこと、これは文部省の指導要領を読むとよくわかるのである。世界史の統一原理は人間性というような漠然たるものに還元され、従来の西洋史と東洋史を適当に排列してゆけば、忽然として世界史という魔術があらわれるという安易さであったと思ふ。世界史論は、多くは世界史教育技術論である。また世界史は、国際社会における国際感覚をやしなうことが目的であるというように設定され、無国籍の教養人をつくる方向をたどることも無にかかった。

すべてが終戦直後の混乱のなかにすぎて行くのであるが、戦争という基礎的世界体験のなから、やはり戦前われわれが考えたり、西欧の歴史家の説いたりしたのはヨーロッパ中心主義の世界史像であったことが反省された。日本であらたるものは、日本を原点とした世界史像でなければならなかった。このばあい安易に西欧社会

のパターンを考えてしまったのは、ひとつは一国社会内発展のみに視野をかぎり、いわば非世界的な理論構成に急であつたためであった。

第三にとりあげられるのは、特殊研究領域の深化であり、それは二つの側面でおこなわれた。ひとつは政治、経済、思想という特殊領域における歴史研究の専門化であり、他はとくに日本史における地域研究の深化である。いずれにしても歴史研究家は基本的には具体的特殊領域の実証研究からはじまるのであるから、この専門化は歴史学の飛躍的發展の一契機であり、過去二〇年間の発展を規定した契機であつたと言つてもよい。しかしやはり研究の専門化には、おとし穴があつたことが反省される。これは数年前論じられた点であるが、歴史研究が専門化したために、歴史の全体像がうしなわれ、研究そのものが細くなればなるほど漠然たる、非人間的なものになってゆくという批判であつた。この批判は、歴史観というものがいつもグローバルに歴史全体にわたって、組み立てられていることを忘却している。それとともに研究者自身が、具体と理論的抽象化、特殊と普通の弁証法的統一をなんら自覚しない点にも問題があるのは事実なのである。研究の専門化は現在、国際的傾向であり、同時にこれにたいする反省もまた日本だけのことではな

終戦直後の史学界については、個人的体験と学業動向が交錯し、かたなりつくすわけにはゆかない。上にあげた三点は、現在、なんらかの意味で、これを客観化し、批評点をあけるものにかざられている。批評点をあけるということは、それが過去のかすとして抹殺されたものでなく、いまなお存続し、現代史学の基礎的部分として定着しているという前提からである。(本書註四)

戦後の学 昭和四十四年四月戦後第一回の入学生一〇名

生たちを主として定学多寡を再編した。この年一月の修通年で自由民主主義者連盟が再開し、二月には第三次吉田内閣が成立した。戦後、上げ潮のごとく高まった労働運動も、民間系、新産業別の結成によって分製状況を示してきた。戦後、労働運動の先端にあって指導してきた高野党に対する占領軍の権力による弾圧が、しだいに巧妙に強化されてきたからである。この年七月五日の下山事件、七月五日の三浦事件、八月七日の松川事件という一連の黒い霧の中で行なわれた事件は、この間の動向を暗示しているものである。この年、銀座カンカン娘、トンチンコ節といふ會なし唄が流行し、一方で、水井隆の「この子を殺して」という原爆の悲惨を訴えたノン

## 混乱期の学生

小林 通雄

終戦のことを万里の長城の一角の地で知らされた一兵士である私が、ふたたび教壇に立ち帰るの幸福をあた

えられて学校を訪れたのは、昭和二年の二月のある日のことであった。戦争のはげしい破壊の跡が果てしもなくつづき、満目荒涼たる廣場が目にせまるのみであった。そのなかであって立憲の校舎は萬の葉こそ枯れ落ちたりとはいえず、在りし日の姿そのままに、夕陽を浴びた時計台は虚空に向って屹立し、そのたたずまいは暖き愛の手を出せるものごとくにみられた。かつては鎮ざされていたチャペルの扉は苦惱に嘔く人びとの前に大きく開かれていた。防空の遮蔽の施されて薄汚れた旧予科校舎の教室内の黒板には書き消された文字のいくつかが読みとられ、白黒の粉が教壇の上に飛び散っていた。大学はすでにその機能を回復し、新しい時代の教育と研究の場としてのその役割を営みつつあったのである。

しかし世情は研究と教育を遂行するに足るほどのものではなく、敗戦の事実は重苦しく日本の上においかぶさっていた。戦前のカリスマ的支配から解放されたといえ、まさしく呪術より解き放された際の状態に似た虚脱の状態が、人びとの心の支配者となっていた。従来、価値体系の全面的崩壊のなかに放り出された人びとは、ただ虚無の深淵に臨むの感に畏縮し、その精神は枯渇し、黄色の色彩が空間を埋めていた。「はじめにエッセンあり」との語そのままに、銀鎖の鎖状よりわが身と家族を

救うに足るのみのわずかの食糧をもとめて、喧噪の間に彷徨する日々が過ぎてゆくののみであった。

じつに、大学は、この言い尽くせぬ悪条件のもとに、民主的社會と文化的國家の建設を相うに足るつぎの世代を育成するの目標に向かって、その巨歩をふみ出したのである。大学の復活、ことに本学の場合においては、國家と宗教の問題よりする幾度かの困難なる試練を克服し、ときにこれに傷ついた戦前の歴史を回顧するときに、戦後の本学の復活は、はかりしれざる光明の照りがややく前途が開かれたのである。「神と國のため」の標語に象徴される立憲精神とその伝統に生命の息吹きがよみがえりが具現した、という意味においてである。そして、このことこそ戦後の立憲の歩みをふり返る際に特記されるべきことなのである。

さて、ここに流動と変転の重なりあった時代にその青春をすこす学生たちが燐学してきた。

かれらは祖國の人びとの生命と財産と文化とを護らんがために戦線に、また勤労動員に参じた人びとである。しかしその得た結果が敗戦であったことにかれらは苦悩せざるをえなかった。かれらはおのれの歴史的体验を思案の中に沈潜せしめることによってその解答をえんと努力していた。教条的な軍隊教育に養われたかれらの頭は

既成のものがすべて、規範と成りえなかつた眞實の世界の中においてとまどつて、精神の糧を求めんとする人びとの群れが哲学書発行のその日、政書館の前に行列を作り、にわかじこみの古本屋を開業して、書物を漁り、学校の図書館の乱雑に放置されている書物の一冊々々に食ひいるような目をかがやかして読み耽り、教師との対話をとめてたがね行く等々。かれらは自らの頭によって真理を追究し、自らの手によって伝統を再建し、新文化を創造してゆかねばならなかつたのである。そして、そのなかから政治の側面に強く傾斜していったもの、科学の追究に精神の燃焼をもとめたもの、あるいは信仰の場とその心の上昇を感じとつたもの、文学の世界を訪れるものなど、すべての者が生の光栄を確かめようとの努力を積み重ねていった。

また学生運動も二三年のころからようやくあらはれ、すでに始まつていた冷戦の世界情勢のもとで、平和と民主主義が占領下においてあえられた仮装であるとの切迫した解釈に押されて、急激にその政治性を強めていった。

これらの復学を大学にむかえたころ、二一年には文学部の講義は再開され、予科の授業も開講されていたが、史学科はなお戦前の断絶のままに置かれていた。学校に

同者の実現と発露こそ、高度成長時代をむかへての国内状況の好転と相合して、いまの史学科および史学会のすばらしい発展を形成したのである。

この動きのあったころ、予科教授であった私は直接これに関与するところなかつたが、海老沢氏宅でもたれた氏の同期生の加川要三の追悼式に参加するの機に、卒業生の方々の間に史学科の再開を促進するの意見がかけられていたのを知つた。これはたいへんである。なお史学雑誌の既刊分は岡田太助教授の『民族学論攷』と津田左右吉博士の『歴史の矛盾性』との二冊である。そしてついに二四年の新制大学の発足とともに、野々村成三先生を科長にいただき専任教授四名をもち、史学科が再開されるにいたつた。

その前年の暮れのある日のことであつたと思うが海老沢宮本の同教授に同行して時の總長佐々木順三先生にお会いしたが、今のアメリカ研究所の一室であるところの当時の教授室であつた。こう書いておられるその時の印象がありありと浮かんできてくる。先生はわれわれの顔い出るところをそのままに承諾くださったのであつた。最初に入学した学生の数は一七、八名、その指導教授は中国文学の野口定男教授で、女子学生は二名であつた。これらの者が卒業にいたるまでに、あるいは他学科に転

おける歴史教育は戦前の皇国史観の当然の否定のなかにいて、その一時停止が連合軍の命令としてあえられていたが、教科書『國の歩み』が作られるにおよんでその停止令が解除された。そして予科において西洋史を清水博教授に日本史を宮本繁太郎教授が、東洋史は私が担当することとなつた。しかもなお史学科の開講は日程にばらにいらなかつた。その事情については宮本教授が史学科創設四〇週年記念特集号の「史苑」の序文のなかに述べておられるので、それを参照していただきたい。

しかもこの間において史学科関係者がその早急なる開設に努力を尽されてきたことは、二一年に明確された史学刊行趣意書で読まれば、まことに明瞭である。その動きを読みとることができよう。この趣意書は史学雑誌の巻末に附せられており、全文三六〇余字からなり、手塚陸奥、海老沢有道、宮本の三教授がその編集委員として署名していられるものである。そこには力強い文章をもつて史学会の再出発が宣言されている。これは史学会の歩みを見るうえで欠くことのできぬ歴史的な文書である。編集者の方々は、これを世に出すことによって史学科の存在を明示し、学科開設の機運をもちあげようとの意図を示されたのであろう。感じにこの宣言文のなかによみとれる理想とそこに運動を思ひよるる気魂、この

じたり、進学したりして、結局、女子一名、男子九名、総員十名の学生が二八年に卒業していったのである。また、そのなかには、一般教養課程を経てきた者、予科から転じた者、専門課程のときに加つた者、他の大学から転入した者など、その出自はいろいろであつた。それらのなかで東洋史の卒業論文を提出した者は男子二名であつた。これら卒業生は、その全員が健在で、いまや社会の中堅となつて各方面で活動していることを報じておこう。

つきに史学研究会のことを記しておきたいと思う。史学研究会は戦後の文化会設立に伴つて戦前の史学同好会を改称したものである。戦前の史学同好会は史学科の史学会にたいして予科及び他学科の学生の史学の研究に興味と関心をよせる者の集いで、とくに史学科の学生を主体とした学生団体ではなかつた。その性格は改称後の史学研究会にも引き継がれたが、新制大学の建て前からみて旧制大学時代のごとき予科と本科との区別を厳守する必要なしとの判断のもとに、史学科の学生をも包含するものとして発足した。当時この動きにたいしての批判もあつたが、いまだ専門の分野にすぎず今年まで形成されていながつた現状においては、これはそのほとんどの問題視すべきことではなかつたように思われる。この史学同好会の復活に尽力されたのは、復学した会員の富田

が、あるときには進火のともるころまで、ときには夜間までおとんどおこなわれたことは、今にして思えば、学生たるもの幸福の上なきものありといふべきで、これが会の発展の礎石を築いたものであることを記しておこう。なお当時の会員で現在学内に講義をもたれている者は、文学部の榎井芳郎、経済学部の荒川邦寿、一般教育部の水田寿一の三君であることを付記しておく。

(本学教授)

神父のみた様 戦時中、大学のチャペル(教会)は配教直後の立教 異教徒大佐と、それに同調した、少数の教団たちの手によって破壊され、「みそき」道場から「食糧倉庫」と化してしまつた。終戦直後の、チャペルの状況と、混乱期をみてきたフアラア、竹田鉄三師の回想を聞く。なお、竹田師は二年一〇月ごろから、立教のチャペルとして赴任された。また、さらに、この文中にもよめられている高松孝治は、戦時中のチャペルであるとともに、キリスト者として一貫して、その立場を守り、軍部の圧力にも屈しなかつた人である。これは別に語るべきであらうから、ここでは多くよめない。この高松は、いっぽうにおいて、早くから考古学に興味をもち、東京博物館に「高松コンシジョン」の名のもとに、その一部を展示されたりしている。また、切手の国際的な蒐集家としても知られている。

慶太郎君(経済学専攻卒業生)その人で、すでに述べたこときその日その日の生活を追われて学問に専念しえることが不可能であつた世情のなかにあつて、会員一〇名にもたつしなかつた。はげしく読書をもちよつて読み合ひの日課であつた。

研究会のまとまつた部会活動がたれたのは、二三年のころからで、二三年に文求堂から出版された佐野孝氏の『清朝社会史』の読書会が東洋史部会をつづけられた。なお当時のインフレの状況を知る一助にもと記しておくが、二一年四月に出版された全文一七頁の『清朝社会史』の「農民暴動 第三編の定価が一六円、ついで同年の一月に出た「国家と社会」の第一編のそれは全文一四二頁で三五円となり、清朝の物価の上昇の動きをはげしさを示している。この清朝史研究部会については学生の関心が集まつたのは日本上代史の研究であつた。すでに高内宏先生の「日本上代史の研究」が世に出ていたので、那珂博士、津田博士の研究成果をこれとつき合わせての議論がつけられた。天皇制批判の高まりといつた社会的議論の刺激も加わり、また宮本教授の魏志倭人伝の講義に啓発されるころあつて、学生がこの問題にたいする研究心はなかなか旺盛なるものがみられる。学生の自分のポケットマネーを出しあつてまで学外

からこの問題にたいする講師を招く努力を払いたいという熱情にこたえて、中央大学の鈴木俊教授が謝礼なしで「倭人伝の史料系統について」と題しての講義をうけもつてくださったもの、このころのことであつた。そして二三年の登呂の遺跡の発掘が、さらにこの問題への学生の興味を考古学、民俗学の分野にまで拡大し、ようやくつあつた社会学的思考法がこれに加えられて、文書の撰録から過去の物質文化の即物的研究によつて日本文化の伝統を探り出せんとする傾向にすすんでいった。この動きにたいしては、保谷の民族博物館を管理されていた宮本教授と地理学の中田教授のご指導によつて大いに実績が積み重ねられていった。他方、文化団体の日常の研究成果を発表するの場は文化祭であつた。史学研究会は年々の文化祭に参加しているが、とくに、二四年度のそれは学院創立七五週年を記念する年にあつたて行なわれたので、史学研究会が主催して学院創立以来の貴重な遺物・史料・記録および蔵書中の複製書を表示し、好評を博したことがあつた。

以上史学研究会の歩みの一端を記しただいである。なお末尾となつてまことに恐縮ではあるが、いまの社会学科の一階の入口の右側の一室の部室において、手塚・清水・石島・立入の諸教授のご専攻の分野からする講義

## 神父のみた戦後の立教

竹田 鉄 三

チャペルは荒れていた。金具の付いたモノ、十字架のしるしの付いたモノは、破傷つけられてあつた。よほど十字架が憎らしかつたらしい。入口にあつた石の十字架、大理石の祭壇、祭壇の十字架は無論どこかへ行ってしまつた。俄か作りの木の十字架が置いてあつた。パイオルガンの飾りパイプは前の欠けたように三、四本棄てられてあつた。それに会衆席がない。教室の椅子を運んで来て当分間にあわせただのである。戸もドアも到る処ガタガタである。正面玄関の大戸ナドはキツチリ締めて、間かなくなつて礼拝の直前に体当りで開けた。そんな状態で高松先生と水曜日、日曜日の礼拝を始めたのである。初めの日曜日には五人の会衆。それも米国の兵隊が三人。礼拝を英語でやつた。そのうち、立教チャペルで日曜日の礼拝が始まつたという話が伝わり会衆が次第に多くなつた。その年のクリスマス近くには、相当集まるようになった。木の床を下肢穿き、兵隊靴、長靴がコツ、コツ、ガツタンカラコロ、ガツタンと床を鳴らし

ばなくてはならぬ。藤孫吉之助教授が総長事務取扱になつた。パージの命令書を持って、ラッシュ氏がソロゾロと軍人を引き連れて現われた時は、実に、劇的大あらしであつた。私は遠くから見物していた。まづ御真影をエライ鳩に捨てると命令したそうである。パージに就いてはその後も一つ妙なのが起つた。高松チャブレンが翌年の二月十三日逝去したので、その後任として西村司祭が就任したが、彼がまた二十二年六月に追放になつた。西村氏と私は以前から交際の深い方で、イイ人がチャブレンになつたと喜んだのである。つまり私は彼の補助チャブレンとなつたワケである。人柄よりチャブレン・シツプレも同じである。ところが左翼の連中が戦時中彼が書いた論文や説教類を掘り出した。それを種にマックアーサーに直訴したのである。ある時藤田主教が私を呼び出して「お前が追出そうと作略をしたのだらう」と偉くシゴかれたが、事実は決してそうじゃないのである。寧ろその反対で、恐らく藤田主教が身近の者にこそおのゝかされたらしい。イヤな思出である。モ一つイヤな思出は、オークスという宣教師が居た。口も筆も通る男で、アメ・ラクには大いに貢献した。この男が私のやり方はダメだといふふらし米国の本部にも色々報告したようである。それに對し反論を擧げてくれたのがブランスタッド、セー

陪餐に上つて来る風量は社報であつた。会衆も実に種々雑多、学生もいれば胸に十字架を飾つたパンパン顔もあれば軍服姿のアメリカ兵も来た。その頃既に高松先生は病氣で寝込んでしまつた。戦争中の苦勞がたつたので重病、東京女子近くの家に度々お見舞したが、恢復の見込みがない。そうなるにチャベルの仕事は一切自分ひとりで、平日は図書館で働き、日曜はチャベル。その上夜は英語学校、終戦後は何をするにも英語が出来なければ用が足りぬ。日本人は目の色を変えて英語を勉強したのである。毎晩旧図書館の教室に集つて本の本館で初等科、中学科、高等科の授業。亡くなつた教務科の松本君が事務長、重部氏が幹事、久保田先生が校長。この三人は全部死んでしまつた。佛りには教授室でフカシ半を喰べさせてくれた。寒い冬の夜をトボトボと長崎グラウンドの家まで帰つた。高松先生の病状は、次第に悪化、クリスマスは近づくと、朝から晩まで構内を走り廻つた。

その頃英神夜学校と同時に妙な学校が一つ出来た。左翼の自由大学。羽仁玉郎という偉い人が首頭取りであつたようだ。学内の事務所を持ち、夜は講義をする。一度降りるの教室で枝が講義をして居ると英語学校連の足音

がやかましいので彼氏大声で怒鳴つた。この自由大学はどういふ風にして出来、どういふ風に消えたか立教学院八十周年にも全然出て居ない。最近日教授に聞いた話に依ると当時、若い作家が小説に書いてたそうである。一つの大学の中に、も一つ経営の違う大学が出来たのである。日本が潰れるかどうか知らぬ時代であつたからそんなコトが起つても驚くにあつたらぬ。英学夜学校と自由大学は間もなく相前後して消えた。

昭和二十年十月二十四日連合軍総司令部から国家主義、軍国主義の思想甚だしき教職員の追放命令が発表された。「立教学院は下記職員を現職より去らしめよ」といふワケで、三辺、阿部、金子尚一、宮崎、小沢、柴田、奥、和田、武藤、帆足、柳氏が所謂パージとなつたのである。何れもやり手の人物ばかりである。戦争中大活躍をしたのも無理ない。併し、この審判が正当なモノであるかどうかマックアーサーは却つて戦争中ではないから決して正しいとはいへぬ。中には却つて戦争中タリスタンの故に苦労した人々も居る。黒氏が第一にパージを解除された。高松チャブレンが書類を書き、私は、調べに来た軍人にも會つて説明をした。

それから、次々にパージが解除された。併し総長三辺、学監帆足が免除になつたのでスグ大学の責任者を連なり、ペリー、等であつた。オークスはその後帰国、事情があつて、牧師をやめた。

高松チャブレンの死は痛ましかつた。戦時中、チャブレンは閉鎖され、一英語教師として勤務。チャブレンでなつたから家は取り上げられ、蒐集した切手全部を売却して、東京女子大の家を買つたのである。病床の枕のモトで彼は息を引き取つたのである。私は死後ソノ十字架を奥さんから貰ひ受けチャベルに持つて来た。それが今の十字架である。あの十字架には病中、折つた高松先生の思がこもつて居る。

高松先生は優れた神学者、考古学者、説教者、学生のよき指導者。亡くなつてからも高松先生はどこに住んで居る、奥さんはどこに居ると、卒業生がよく尋ねに来た。高松先生は私に春から大学で中世期の講義をやらせると本を手えてくれた。その当座やる気で夜遅くまで勉強したが何しろ、先生の死後教師は全く一人、チャベル再建の仕事で朝から晩まで構内を走り廻り、とても勉強する暇がない。とうとう、あきらめた。そこで終戦翌年の春中学校の辞合を貰ひ、大学副チャブレン、中学チャブレンという事になつたのである。

編者註、ラッペン氏は、ポール・ラッペン氏で、昭和十三年ごろ、大学の委員を担当し、戦後、アメリカ軍の陸軍中佐として来日、現在、八ヶ岳清見寮に在住。

(本学キヤンペーン)

戦後一團 山田は再開第一回の入学生で、卒業後、本学生の同盟 図書館に三年勤務し、その後、史学科副手から助手を勤め、その間、東京教育大学大学院に近代史を学び、現在本学一般教育部助教授である。こうした経歴からもわかるように、戦後の混乱からくる移行した道程を知りながら、戦後のわきたつデモクラシーの感動を、ストリートに近代史の関抱に向けているのである。これは、山田ばかりでなく、当時の世代に共通する戦後歴史家の典型の一つでもありと思う。

## 混沌の中の学生

山田 昭次

わたくしが立教大学予科に入学したのは一九四七年、まだ敗戦の傷あとが池袋周辺になまなましく残っていたころであった。池袋駅から大学への道にはバラック建てのマーケットが立ちならんでいて。夜ともなれば、夜の

女たちがガード下からマーケットにかけて立ちならんで客を持っていた。書物も乏しく、大地屋で岩波書店刊行の本を売るというので、列をなして順番をまつたこともあった。

学生といえは、兵隊得りのものも少なくなく、年齢もまちまちであった。経済的にも苦しく、生活費でかせがなければならぬものもいた。下宿も不足していた。地方出身の学生は配給米だけで足りずに空腹をかかえていた。わたくしは自宅から通学していたし、またわずかながら家に畑があったので空腹だけはまぬがれたが、生活の窮乏はまぬがれず、万年筆がなかなか買えないで、インクびんとつけペンを学校にもっていったこともあった。

それでも予科の生活は楽しかった。年齢がまちまちだけにクラスには個性的な学生がいちし、受験勉強から解放されて自由に本が読めるのは何よりもありがたかった。当時の制度では文学部か経済学部かどちらかを決めて入学しても、何科に入るか決めるのは予科修了時であったから、びじょうに自由に本が読めたように思う。

敗戦によって言論の自由が確保されたから、マルクス主義関係の本もかなり出版されていたが、それはにままったく関心もなかった。当時わたくしが読んだのは、阿部次

郎『三十六日の日記』、西田幾太郎『書の研究』、倉田百三

『愛と読書の出發』といったたいものもであった。そうした哲学的または宗教的なものに関心をもつというのは当時の青年の一つの傾向であった。それでも、それは通じて戦前の忠君愛国主義とはちがった世界がわたくしに開けてきた。

予科二年修了したところで学制が変わった。わたくしは一年休学して、五〇年に新制立教大学文学部史学科に入学した。この学制改革について、現在考えてみて不思議なことは、当時大学当局から学制改革がどういった理念の転換をもとづいてか説明されたことがなかったし、学生の関心も論議されなかったということである。教育基本法や学校教育法制定の推進力となった教育刷新委員会委員には、保守的リベラリストから進歩的リベラリストなどがあり、思想は一概ではないが、少なくとも南原繁氏やその他若干の人のびが考えた教育理念は、戦前体験もしくは戦前体験の反省に裏うちされていたように思われる。しかしわたくしの体験でいえば、そうした理念がどれだけ広く大学の教員や学生の間で討議され、国民的財産として蓄積されたのか疑わしい。戦後二〇年にして財界のマンパワー・ポリシーによって解体の危機に瀕している新制大学の運命も、出発当初に一つの原因がある

のかもしれない。

わたくしが史学科に在中に読んだ書物から受けた感銘やおどろきには、戦後の身震期的特徴が反映している。第一におどろいたことは、わたくしが戦前より歴史教育と良心的な歴史研究者の科学的成果とがあまりにへだたっていたことである。いっそうおどろいたのは、羽仁五郎氏の『白石・論吉』で、新井白石がすでに「紀紀」より「魏志倭人伝」が信憑性が高いと述べているのを知ったときである。江戸時代にすでにそうしたことがいわれてきたが、つい先日までそうした科学事実からまったくへだたった歴史教育を与え、国民を盲目にしていた権力者の彼知におどろかざるをえなかったのである。

第二のおどろきは、福沢諭吉・田口卯吉・山路愛山等の明治の民間史学の新鮮さであった。これらには今日の歴史学にもみられる実証性も理論の精緻さもない。しかし当時の日本社会をどうしているかという現実をたいする強い関心から生まれた問題意識や、歴史批判の鋭さはわたくしを魅了させた。とくに福沢の『文明論之概略』にみられる天皇制の歴史批判や、国民的歴史学の提唱からうけた感銘はいまだに忘れられない。

学生時代はわたくし個人にとっても啓蒙期であったが、その前後の暗さを感じさせることも起こっていた。

五二年七月二十九日朝日新聞に家永三郎氏の「歴史教育は遅れ右するか」という一文が掲載された。これは、おそらく教科書検定について家永氏が書かれた最初のものであろう。當時家永氏を一部マルクス主義者は「反動的歴史家」などと称していた。わたくしはそうは思っていない。すでに、そのころから家永ファンであったが、それでもこのおとなしい先生がこういうことをいわれるのは事態はよほど悪いのだろうと思った。そのころから、わたくしの戦後の精神史の第二歩が始まったのかもしれない。

(田代孝/本学助教授)

2 女子学生の登場

女子学生 立教大学の志願者数は年々と増大している。昭和五年に志願者数一六二八五名、三六年一六八六四名、三七年一八七六四名、三八年一九八九三名、三九年一八二二九名、四〇年二四三三八名、四一年二五九七三名となっている。このうち女子の志願者は三七年に一九三名、三八年に二四九二名、三九年に三三〇四名、四〇年五七七七名と急増している。この女子志願者の八〇％は文学部志願者であるが、文学部は女子学生の花ざかりという現象を示している。

卒業年次	男	女	計
26年	名 九	名 一	名 一〇
29	名 八	名 二	名 一〇
30	名 二	名 五	名 七
31	名 二	名 五	名 七
32	名 二	名 五	名 七
33	名 二	名 五	名 七
34	名 二	名 五	名 七
35	名 二	名 五	名 七
36	名 二	名 五	名 七
37	名 二	名 五	名 七
38	名 二	名 五	名 七
39	名 二	名 五	名 七
40	名 二	名 五	名 七
41	名 二	名 五	名 七
42	名 二	名 五	名 七
四年在学	名 三	名 三	名 六
三年在学	名 三	名 三	名 六
二年 в 学	名 三	名 三	名 六
一年 в 学	名 三	名 三	名 六

向上につとめてきた。

戦後の半封建的土壌の層剝の結果、女性はその束縛から解放され、良妻賢民の教育に反はし、キリスト教系の大学が共通にもっている近代的な人間関係、男女平等思想を求めて、これらの大学に進学するものが増大した。こうしたことは、キリスト教系大学の戦後の状況によっても自明である。

だから、立教大学文学部の女子学生の登場から、女子学生の天下の時代への権転こそは、わが大学の、開明・自由・進歩の方向を明治以来、一世紀にわたって辿ってきた道程が繰り返りのないものであったことの一証を示すものといえてよいであろう。

史学科の女子学生の第一期生は第一期生の野村悦子の回想を、ここに記してみよう。なお、第一期生は第一期令子一人であり、第二期生は野村と村村亮(後述)の二人である。

史学科の場合、四〇年の志願者一四〇二名(採用一〇〇名)のうち九二五名が女子で占められている。さらに戦後一五年の統計によつて在学生の男女数を示すと、次のようになる。

この表に示されているように三四年から約百名を募集するようになってから三三四名の入学生は三八年卒業、女子学生が過半を占めるのが恒常的になってきたことが知られる。(なお史学科は選抜に際し男女別をまったく考慮していない)

女子学生 このように、戦後のわが文学部の、わが史学の天下、学科のいちじるしい変化の一つは女子学生の登場から始まって、女子学生の天下時代へと変わったことにある。

ことに立教大学への女子学生志願者の激増の歴史的背景について、ここにふれておきたい。明治以来、天皇制的絶対主義のイデオロギーは、半封建的家族制を温存し、女子教育の面では、夫に服従する良妻と家国の母(賢母)を養成することを教育の本旨としてきた。こうした時、キリスト教系女学校は、男女平等の理念のもとに近代的な女子教育を目ざし、女性解放の上に大きな役割を果たしてきた。わが大学を創始したウイリアムズも明治一一年立教女学院を神田明神下設立し、大阪に照南女学校(現・京都の平安女学院)を設立して、キリスト教主義教育による開明的な女子教育とその社会的地位の

とを付記しておく。

この回想のなから、今日の女子学生と入学の動機や気遣いがかなり異なっていることを、行間から看取されたい。

二番目の女子学生として

野村悦子

「女子学生と史学科を中心とした思い出」をかくように依頼を受けたが、女子学生の体験と、史学科の学生としての経験は容易に結びつかないように思われた。わたくしは、戦後間もない時期に女子学生として大学生活を体験したことに大きな意義を感じており、それは



解放後の女の位置を大学教育のなかで、しっかり自分のも  
のにして、人間らしく生きたいと思つたからである。史  
学科の学生としての経験は、主として学問を対象とした  
生活であるため、基本的には学問の前には男女の区別は  
なく、教室のなかでも、女子学生であるという意識をも  
つたり、感じさせられたこともなかったように思つてい  
る。

戦後史学科が再開された昭和二十四年ごろの大学の校庭  
で女子学生の姿を見ることはまれだったことと思う。わ  
たくしが入学した昭和二十五年には全学を通じて、たぶん  
三〇人前後の女子学生で、現在のように大学の文学部の  
大半を女子学生が占めてしまつて一〇年前の大学生活のな  
かだったことである。したがつて一〇年前の大学生活のな  
かでも女子学生だけを取上げてみて大した話題になら  
ず、昨今のように社会的な問題として大学教育と女子学  
生の学問にたいする態度が論じられたり、また女子の大  
学進学も教育のためというような簡単な理由で進学す  
るほど大学教育が女子の間に普及していなかったように  
思う。

しかし一〇年後の今日ではある大学は女子学生の入学  
規制を発表したり、女子学生で国論など、話題も深刻  
で、解放された女の位置も社会の変化にともなつて新し  
い事態が次々に生じて、必ずしも楽観できない問題が多  
いようになり、問題の解決のためにはう努力を惜ん  
ではならない。大学制度から派生する問題はその原因を  
政治や社会の責任に転化することなくぜひ教育の場で大  
学教育の理念を明確にし、それを徹底させ、学校制度の  
研究と習熟をかかさず、急激な再改革はいそがず真に民主  
的な教育を定着させて、良識と責任感をもつた女物を教  
育していただきたいものである。また卒業後の女の生き  
方においても、結婚が就職かといった二者択一を問うの  
ではなく、職場や社会環境をつくつていくことで持続で  
きる職場を広く育て、個人のもつ能力や人間らしさをと  
おしてその働きが社会に還元できるような生活設計をた  
で、社会的な条件を自主的に広げていきたいものである。

家庭内の教育においても男子には「出世」を期待し、  
女子には「主婦」の座を人生の目標にさせがらであつた  
これまでの家庭教育も、そろそろ根本的な反省と新しい  
展望のうえに立つていかなければならぬ時期にきている  
のではないだろうか。

わたくしが勤務している学校には毎年六月になればか  
ならず教職課程を履修するために、教育実習生が各学校  
から実習に来られるが、立教大学の史学科の学生も毎年  
に思えて、自分の子どもっぽさがあらためて意識させら  
れたものである。

数名は加わつておられる。二週間の教職実習はかなりの  
気苦労や、日ごろ教わる立場にある学生にとつて教える  
ことのむずかしさを経験させるようだ。すべての子定を  
終え、各自の感想を語り合うひとときをもつが、だれも  
が教育にたいする認識をあらたにし、今後の社会科学教育  
にかせられている道の険しさを自覚されるようである。  
こうした経験によつて得た感慨がいつまでも大切に生か  
されるよう願うものである。

印象にのこっている一、二の例として、思い出すのは  
ある先輩で旧制の女子大を卒業し、しばらく家庭の主婦  
として家事や育児に従事されたのち、子供も成長し家事  
の負担も上手に処理できるまでに努力をかさねられて、  
「第二の人生の選択」の機会を積極的にとらえてふたたび  
学窓に戻り、生涯の仕事として学問に取組んでおられた  
が、いつも生きざらした表情で二児の母親とは思えぬ  
ほど若々しく感じられた。当時のわたくしは新しい婦人  
の姿をそこに見た思いがした。そのほかにも中学教師を  
なされていた方や保母として働いていた人など、職歴を  
かさねたうえ、なお学がことによつて「自分の才能を生  
かすために勉強している」という人が多く、自分のもつ  
可能性を広げ、障害の多い社会のなかで人間らしく生き  
ようと志ざしているものが少なくなかった。また、一面  
では肩を張つたような姿には一抹の悲壮感を思わせるも  
のがあつたけれど、当時の大学生活を送るためにはその  
ようなものも必要であつたのであろう。

新制大学の発足当時の大学生活には旧制度の思い出の  
ようなものが残つており、意識の面だけでなく制度の上  
でも戦前の専門学校・高等学校・師範学校を廃止してそ  
のあるものは既存の大学に吸収していったので、当時の  
史学科の学生のなかには、旧制の専門学校・大学予科な  
どで学んでいた人になつて新制高等学校を卒業したも  
のも加わつて、多彩をきわめていた。教育制度の大改革  
直後に大学生活を過ごした人々のなかには、さまざまな  
生活経験を積んだ人が多かったので、まわりの学生が大人

さて、わたくしが史学科でえた大切なものは、専門教  
育を通して学んだ基礎的な歴史の知識と社会科学の方法  
である。またわたくしの精神的な独立のために、時には

手を添え力を注いでくださった諸先生の指導やご配慮を深く感謝するものである。このような背景が手えられなかったら現在の教職の任務にも耐えることができないだろうし、微力ながらも、自分の生活に意義を見出すことができなかったと思う。

考えてみると新制大学の二年間は「クラス五〇」人前後のクラス編成で高校時代とあまり変わりばえのない生活がつつづき、史学科の先生方を知る機会も少なく、それ現在の様に研究助「史苑」や、年一回秋に開催されている立教大学史学会大会も昭和三年以降のことであり、専門の講座が受講できるようになるとも少なく、各自が努力の学生という身近な自覚をもつては所在のない生活に力して勉学の計画をたてないがざりは所在のない生活におちいりやすかったのではなからうか。

わたしの場合は大学を卒業して一年間は大卒を離れたが、その後ふたたび史学研究室の仕事に約三年間ほど従事する機会が与えられ、昭和三年には「史苑」復刊のため、その編集にたずさわり手塚教授、宮本教授の懇切な指導をうけ、六月には第一六巻一号の発行のほびとなった。その時は、戦後一〇年間の空白の時期を抜け出したことに、安堵とも喜びもつかぬ気持ちにとらわれたものである。翌三年の一月には第一回の立教大

学史学会が開催され、一五名の方々の研究発表があり、参会者約八〇名と記録にのこっている。諸先生方のご努力によって史学科も大正一四年に創設されて以来、その伝統に ついて新しい歩みが記されている。

わたしは史学科の学生として最後までこの指導をいただいたのは清水教授である。アメリカ史を専攻し、卒業論文の題目も、したがって、そのなから決めることになった。自分の勉強が専門的になっていくことによって、研究生活のきびしさと忍耐の必要性を知り、歴史史料の取扱いをおして社会科学の方法を身につけていくことの意味を知らされた。卒論の内容は教授の目からごらんになれば未熟な研究でしかないし、五味一年足らずの勉強の結果であるから、なかに付焼尻のようなところもあつたかとも思う。しかし新制大学の最後の締めくくりにして、一つの問題について考え、自分なりに努力した経験をもっていることは貴重なことであると思つて、また教授の指導をおしてその人格に接する機会にめぐまれたことも、その後の人間的な成長の拠りどころとなつており深く感謝している。

諸先生の指導をおして体得できたなかで、島田講師の「ヨーロッパ史」西洋史特講に出講する機会をえ、大学の自治の伝統のなかにおいて、学問の自由・独立が

教授と学生たちの努力と熱意によって守られて、いかにして育成されてきたものであるかを知った。現代日本社会における「大学の自治」の問題も一つの転機に立たせられているが、真理を探究する学府が国家権力にくみするものであつてはならないと痛切に感じさせられる。

その他、井上教授のフランス革命の講義をおしては近代市民社会形成に関する古典的な形態を学ぶ機会をえた。先生のテンポの早い授業についていくためには、かなりの努力を要したが当時のノートを読み返しながら、高校世界の授業の資料にさせていたたいだいで、先生からは授業以外にも折りにふれて、歴史関係書・文学書などを紹介していただいたが、なかでもアイリッシュ・パウア著『中世に生きる人々』、先生の訳によるアンリ・カロツ著『奇妙な敗北—フランス抵抗史家の日記—』からは強い印象をうけた。歴史家の職分を誠実につくり、学問と実践の信念に貫かれたプロックのヒューマニズムと歴史家として世に立つ姿勢を知ることができた。

わたしは大学生活の最後の二年間で学んだことや、史学研究室の仕事に従事してえた経験がわたしの働きの拠りどころとなつていっているという（こと）を、あらためて感じている。

### 3 アンボハンタイの叫び

安保闘争 ● 一九六〇年（昭和卅五年）一月六日、日米安保条約の修正 条約および行政協定改訂の日米交渉が岸偉介内閣によって受諾し、一月一日にワシントンで調印された。調印のための全機団渡米に反対し、一月一日には約一〇〇〇名かいかい全学連の学生たちは羽田空港に集りこみをもって抵抗した。四月ごろから、安保阻止のデモはじまりに全国民の中に波及していった。四月二十六日には国会議事堂付近に六〇〇〇人余の学生が集りこみに入り、警官がかれらに襲いかかり多数の負傷者を出すにいたつた。安保を権力によって強行しようとする岸内閣のロコツクな政策が、かえって国民の反感をそそり、しだいに岸内閣は国民から浮き上がった存在になつていった。

五月一日日民党は単独で安保条約を延期延長を強行するため武装警官五〇〇余人を国会に入れて可決（〇〇日未詳）し、民主主義をふみにじり独裁的な性格をあらわに示した。この日一万人のデモが国会周辺にうずまき、国民の自民党にたいする反感と平和と民主主義を守る声は、全国的な規模で拡大し、各地から続々と国会請願デモのために出立する者が相ついで。この月二十六日に、